

法廷の魔女

高木 彬光



法廷の魔女 ￥ 400

0293—720918—5170

著者無検印承認

昭和四十七年八月五日印刷
昭和四十七年八月十日発行

著作者 高木彬光

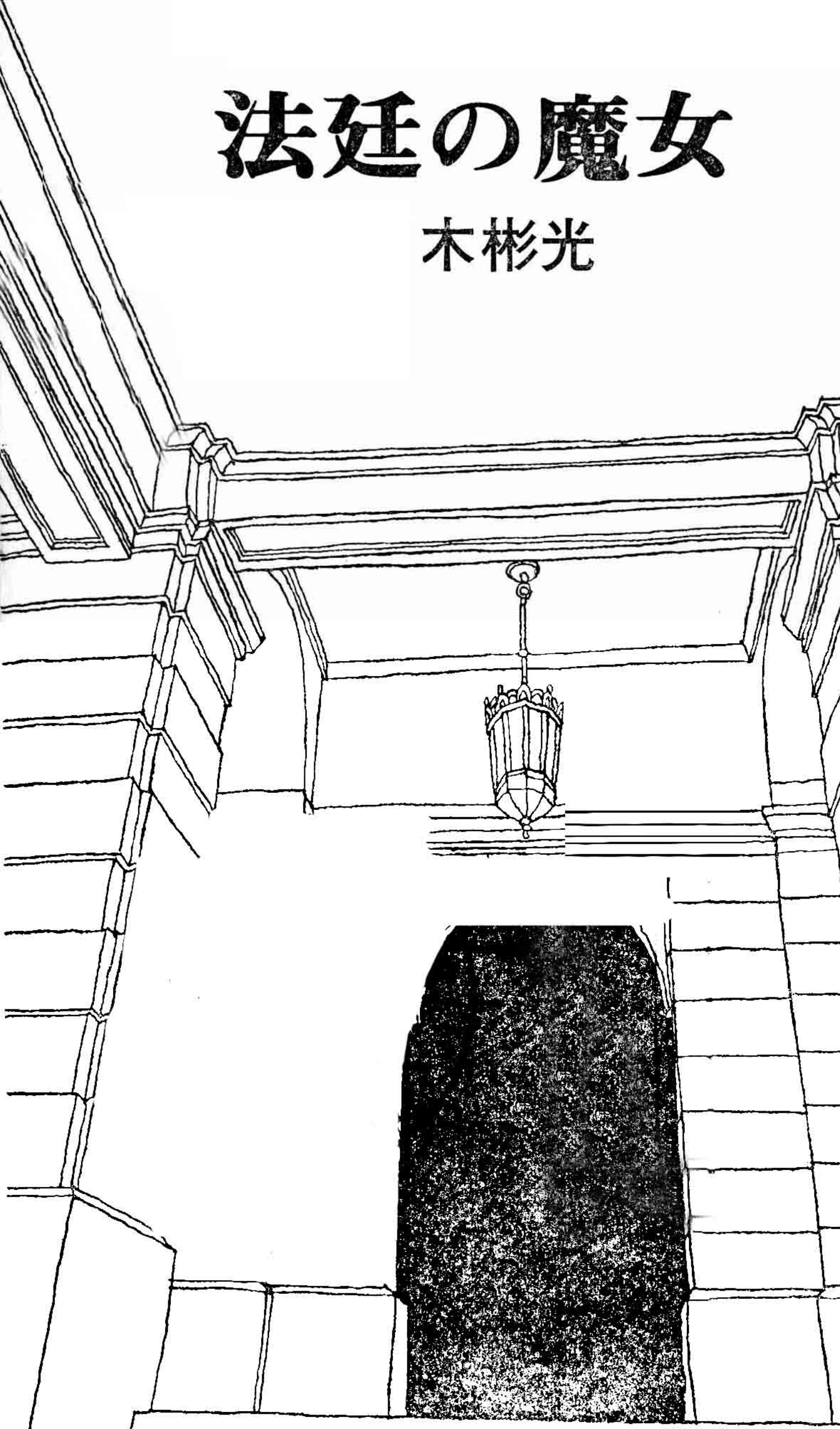
発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区西大久保三二二
出張所 東京都新宿区弘方町一番地
振替・東京二一七五七
電話・(三六)二五五〇

法廷の魔女

木彬光



目次

第一章	奇妙な依頼者	五
第二章	川瀬家の人々	二五
第三章	死体をめぐって	四〇
第四章	起訴	五五
第五章	波紋	六八
第六章	開廷	二〇九

第七章	毒殺未遂	二九
第八章	敵性証人	一五〇
第九章	一つの希望	一七〇
第十章	火花	一八二
第十一章	指紋と環	二三三
第十二章	血の恐怖	二三三

装幀 日暮修一

第一章 奇妙な依頼者

1

その依頼者はたしかにおびえていた。百谷泉一郎ひやくたにも、最初はこの相手がどこか精神に異常があるのではないかと考えたくらいだった。

もちろん、弁護士のところへ相談にやって来る相手は、大なり小なり、心に悩みを持っている。

ことに泉一郎は、刑事専門とっていいくらいで、民事訴訟はほとんど手がけていないのだから、一般的に客だねはいいいえなかった。本人自身は、留置場や拘置所に入って出て来られないとしても、犯罪をおかすような異常な環境で生活して来た以上、弁護士の事務所へ弁護の依頼にやって来る家族たちにしても、人相はよいといえなかった。

家族たち自身は、犯罪と何の関係もなくっても、こうして身内から犯罪の容疑者が出たというだけで、自然に憂いや心痛は顔にあらわれる。

弁護士を長くしていると、事件を依頼して来る家族の顔を一目見ただけで、これは詐欺だとか、殺人だとか、犯罪の内容まで見やぶれるようになるという話だが、これもまんざら、でたらめとばかりはいいきれないだろう。

しかし、この川瀬雄三と名のつた男の顔を最初に見たときには、泉一郎も事件の内容はさっぱり見当がつかなかった。年は五十五六と思われるが、身につけている洋服の生地も英国製らしい上物だし、腕にはウォルサムらしい金時計が光っている。額が妙に黒ずんでいて、顔色はあまりよくないが、それでも会社の社長らしい風格は十分にそなえていた。

「川瀬産業株式会社取締役社長」

という名刺の肩書からだけでは、事業の内容はわからない。

「お仕事は何をなさっておいでです」

泉一郎はまずたずねて見た。

「商事会社で、あつかう物は、主として織物類です。資本金は一千万円ですが、年間の取引額は、十億をちよつと越えますか」

それなら、いちおうの会社なのだ。大会社とはいえなくても、二十人ぐらいの社員は使っているだろう。本社も旧丸ビルの七階にあるというのだから、まあまあというところなのだ。

「ところで、御用件とおっしゃるのは、何でしょう？」

泉一郎としては、事務的な質問をしたつもりなのだが、この返事あたりから、相手の調子はおかしくなつて来たのだった。

「私は殺されるかも知れませんが、それで、先生に、その場合の後始末をおねがひしたいのです」

「何ですって？」

泉一郎は眼を見はった。死期の近づいたことを悟った人間が遺言状を作ろうとして、弁護士に相談

原
书
缺
页

原
书
缺
页

たのだ。

「それで、その胸さわぎが、最近では特にお強くなったというわけですね？」

「そうです、この調子ではあと一月とたたないうちに、何かの事件がおこるでしょう。それに、最近うちの猫が二匹も、ころりと死んでしまったのが気になるのです。獣医の先生は、なにか毒の作用だというのですが」

「毒を猫に？ 誰かが毒を手に入れて、そのききめをまず猫でためしたというわけですか。しかし、猫というのは、案外意地のきたない動物ですから、たとえば隣りの家などへ迷いこんで、鼠とりの入った団子か何かを口にして、死ぬこともないとはいえないでしょう」

「私も、そういうことはいちおう考えては見ました。ただ、先生のいわれるには、これは猫いらずのような隣系統の毒ではなく、青酸系の毒だということです。鼠をとるのに、青酸カリを使うというような話は、あいにく聞いたことがありません」

「そういえば、たしかにそうでしょうね」

泉一郎は額をおさえて答えたが、相手はいよいよ深刻な顔で、

「それで、先生。これは妙な話ですが、たとえば殺人ではないかという疑いがある事件でも、医者とうまくないあなあをやりさえすれば、解剖にまわることはないでしょう。火葬になってしまったら、もう死因も何も、はつきり見きわめはつかないでしょう」

「それはたしかにその通りですね。ただ、そういう御心配がおりなら、まずしかるべきお医者に御相談をなさっておかれたらいかがです。もちろん、医者の中にも、金でたのまれて、死亡診断書を偽

造するような人間もないといえないでしょうが、それは特殊な例外でしょう。主治医がしっかりしていたら、死んだときすぐかけつけ、変った徴候が出ていたら、死亡診断書は書けないと頑張るでしょう」

「しかし、先生。私のように社長などとしていて、いちおう地位も財産も出来てくると、生きのこった者はどうしても、体面とかこれからの信用とか、そんなものを気にするものですよ。家族にしても、会社の者にしても、できるだけ、さわぎを起すまいとすることはわかっています。それに、人を殺そうとする人間なら、できるだけ最善の機会と方法を選んで、嫌疑のかかるのをさけようとするでしょうし」

「すると、あなたは御家族の誰かが、あなたを殺しはしないかと、たとえかすかな疑いでも持っておられるわけですか？」

「それは何ともいえません。ただ、私はあらゆる可能性を考えておかなければと思うだけです。私は人一倍、復讐心の強い男ですから、もしも殺されるようなことがあったら、その犯人はこの世にのさばらせておきたくないのですよ」

川瀬雄三の眼は燃えていた。氷の中の焰というような光が、異常な執念を感じさせていた。この調子では、いままでも、仕事の上なりほかの面なりで、ずいぶん人を泣かせて来たのではないかと泉一郎は思っていた。

「わかりました。それで実際問題としてはどうすればよいとおっしゃるのです」

「私はいろいろ考えました。それで、先生に私の顧問弁護士になっていただきたいのですが……い

や、会社のほうの問題には、何もタッチして下さる必要はありません。そっちのほうの問題は、あったとしても民事でしょうから、その時には藤越先生の奥さんとでも相談して下さればいいでしょう。先生には、私の殺されたときの後始末をして下さることを唯一の条件に、個人的な顧問になっていたみたいです」

会社の顧問弁護士というのは、たしかにこの職業には一つの財源だった。ただ契約を結ぶだけで、事件がなくても、きまった収入が保証されるからだ、この申し出も、ちよつとふつうの話とは違っていた。

「後始末というと、たとえば遺産の相続分配、そういう問題も含まれるのですか？」

「いや、その点ならば、このあいだなくなられた藤越先生にお願いして、公証人も立ちあわせ、正式な遺言状も作りましたから、私が死んでからも、法律的にごたごたの起ることは、まずなかろうと思います。そのときの先生へのお礼のほうは、あらためて書き加えてもいいと思います、とりあえず、契約料として二十万、毎月のお礼が三万、私が死んだときの調査料が三十万、犯人がつかまっても起訴されたときのお礼が五十万という条件ではどうでしょう？」

2

「ペリ、妙なところで妙な金が入ったよ。契約料が二十万で、毎月のお礼が三万だ。ペリにも十万あげるから着物でも買いたまえ」

川瀬雄三が帰って行くと、泉一郎は妻の明子を呼んで、十万の札を前にならべた。

明子は、兜町でも智将といわれる投資指導家、大平信吾の娘だった。その血をひいているせいか、女のくせに勝負師的な性格を持っていて、自分でも相場に手を出し、ますらめなどと呼ばれていたものだった。

結婚してから、泉一郎は二人だけになるとこの妻をペリと呼んでいた。フランス語で、妖精、仙女という意味なのだが、たしかに明子には、まるで子供のようにあどけないところがある一面、男もおよばないふしぎな直感力が時々ひらめくものだった。

そんな明子のことだから、十万や二十万の金額にはおどろくわけはないのだが、今度はちょっと不審そうに首をかしげて、

「毎月きまってお金をいただくという、顧問弁護士をひきうけたのね」

「そういうわけだよ」

「でも、いま来たのは、会社の社長さんでしょう。ふつうの会社は、刑事の事件にひっかかることはめったにないわね。なにか、相談を持ちかけられるとすれば、九割まで、民事の事件じゃないかと思うけれど……」

「その点は、僕も当然だめをおしたよ。民事事件の裁判は、ぜんぜん性にあわないからね。ところが、彼のいつていることは変っているんだ。自分は間もなく、殺されそうな気がしてしかたがない。だから、死んだときの後始末を今からたのんでおく。そのほかには、何もする必要がないというんだよ」

「何ですって！」

明子の大きな二つの眼は、まるで火のように燃え上った。

「話して。あなた、そのお話を、もう一度、すっかり話して見て」

「僕もそうするつもりだったよ」

泉一郎はゆっくりと噛んで含めるようにいまの川瀬雄三の話をくりかえした。

「ここに封筒が置いてある。これは、彼が死んだという知らせを聞いたとき、初めて開封するという条件つきで預かったんだ」

「中には？」

「解剖依頼書が入っているそうだ。そのほかにも、何通か重要な書類が入っているといったが、僕の役目の一つは、彼が死んだとき、家族の誰が反対しようが、社員たちが何というおうが、故人の遺志をふりかざして、死体を解剖に持ちこむことにあるんだよ」

明子も大きく身ぶるいしていた。

「妙な執念の持主なのね。復讐心が人の何倍か強いね。それはべつとしても、誰かに殺されるだろうという恐怖心が、心にこびりついて離れないのね」

「僕もそう思った。最初は、仕事が忙しくてノイローゼにかかっているんじゃないか。まず、神経科のお医者にも相談したほうがいいんじゃないかとも思ったんだが」

「でも、飼猫が二匹も毒殺されたのがほんとうとすると、その心配も思いすごしとだけはいえないみたいね。ノイローゼとばかりはかたづけきれないわ」

明子は、長いしなやかな指を、テーブルの上で組みあわせて、

「ねえ、あなたもこの家族の話はいちおう聞いたんでしょ」

「もちろん、だめはおしたとも。彼の話では今度の日曜に、僕を自宅へ招待する。そのとき、顧問弁護士をたのんだと、みんなに知らせておくということだった。もちろん、仕事の内容は、秘密にしておくわけなんだが」

「すると、彼は自分を殺す可能性がいちばん高いのは、家族たちだと思っているのね」

明子は唇を噛んでちょっと考えこんだ。

「たしかに、ふつうの常識じゃ、ちょっと考えられないことだよ。ただ、その家族構成を聞いたとき、僕もこれとは考え出した。殺人とまでは行かないとしても、家の中には、かなりの不和がありそう。彼が死んだなら相当のごたごたが起ったとしてもふしぎはないね」

「どんな家族なの？」

「まず、僕の聞いたかぎりで、彼の結婚歴を述べると、彼は今まで三度結婚しているんだ。最初の奥さんは結核で死に、二度目の奥さんは神経衰弱で自殺したというんだ。いまの奥さんは二十七、自分の娘といってもおかしくない年ごろだね」

「よほど結婚運のわるい人ね。お金は持っているんでしょけれど、天は二物を与えずかしら」

「彼は自分でいっていたよ。そのことは、気になってしかたがなかったんで、占いの先生に相談したというんだ。そうしたら、手にビアラシバとかいう線があつて、女の二人や三人は、殺すような運命になっているというんだ。もちろん、手にかけて殺すほど強い意味じゃないが、結婚した相手がこう

して運を食われてしまって、早死にするということらしいね」

「あなたの手には、そんないやらしい線は出ていないでしょうね」

どんなに聡明だといっても、明子もやはり女だから、時にはこうして話の中に、嫉妬の感情もまじるのだった。泉一郎はかるく笑って、言葉が続けた。

「僕の手相は、いずれ誰かに見てもらうことにして本論に返ろう。次には子供たちだが、最初の奥さんは優子といって、世津子という娘を作った。これが長女にあたるわけだが、二十三でまだ独身、家でいっしょにくらしている」

明子は、鉛筆と紙をとり出して、名前と関係を書きとめていた。

「二番目の奥さんは時枝といって、二人の子供がある。上の公一というのが、長男、二十六で独身、まだ家にいる」

「こっちの人の年が上なの？」

「つれっ子というわけじゃないんだね。最初は二号さんとして彼の子供を作った。戸籍上は庶子だったらしいんだが、後で正式に結婚したから、自動的に籍に入ったわけだ。この場合、法律的には、正式に結婚して出来た子供と同じと見なされるんだよ。その下には、澄枝という十九歳の娘がいる」

「この人も、とうぜん独身なんでしょうね」

「恋人に近い友達は何人かいるらしいが、法律の上では問題にならないね。それからいまの奥さんが綾子さん、結婚して五年しかたっていないそうだが、子供はいない」

「それだけ、前の奥さんたちの子供があって、しかも自分と年がほとんど違わなかったら、その人の